藤　女　子　大　学　　No.68

図書館だより

'04.07

ヨルダンの私人主義

木村　信一（英語文化学科）

6年前になりますが、家内がJICAのシニア・ボランティアとしてヨルダンに2年間単身赴任した折、夏休みを利用して5週間ほど、陣中見舞いにヨルダンを訪れました。

アラブ世界に身をおくのははじめてでしたが、最も印象深かったのは、ヨルダンの人の独特のあり方です。重厚な威厳を漂わせる一方、どこかのらりくらりと、いい加減です。公共の規律にたいしてはまことにおおらかで、「みなが決めたルールなのだから、みなできちんと守りましょう」とかいう小学校的な発想はありません。ルールはあっても、その例外は、みなが望むだけ作り出すことができます。

といえば、ずいぶん呑気にも聞こえますが、これが交通ルールともなれば、話は別です。ヨルダンでは交通事故が多く、歩行者を含め、死傷する人が大勢います。ルールはあってなきがごとしで、当事者のあいだの暗黙合意のわずかなズレが大きな事故につながります。しかも、加害者の「責任」は滅多に問われず、不測の事態に備えなかった被害者の「不注意」ということに話は落ち着きがちです。けっして呑気なわけではなく、むしろ、そういう負担を荷いながらでも、ルールに縛られない余地を互いに認めあうことにおいて、堅い覚悟のようなものがあるようにも思います。

このことに関わって思い出すことがあります。家内のマンションは山の手のジャバル・アンマンにあり、大家は在ヨルダン2世代目のパレスティナ系実業家で、彼の母親がマンションの1階に住んでいました。母親はパレスティナから移住してきた第1世代で、小柄な人ですが、ビッグ・ママと呼ぶに相応しい威厳と貫禄を備えています。年代もののフォルクスワーゲンを乗り回し、ぼくも同乗させてもらいました。慎重にハンドルを握りながら、彼女は、ヨルダンで最初にライセンスを取得した女は自分である、と胸を張りました。そして、ひとくさり：

「ヨルダンでの運転心得をひとつ覚えておきなさい。他人を信用してはいけない。自分がミスを犯すのではないかと案ずるには及びません。他人

目　　次

ヨルダンの私人主義 ……1
木村　信一
読まれています　現代の女流作家達 ……4
新任スタッフ紹介 ……6
雑誌担当者のつぶやき ……7
お知らせ ……8

が犯すかもしれないミスにたいして、いつも注意を怠らないことです。」

滞在が半ばを過ぎたころだったので、その言葉には思い当たる節もありました。たしかに、ヨルダンの人は他人を信用しない、というか、他人を信用することを強く自制するところがあります。といって、けっして疑い深いわけではありません。人間関係がぎすぎすすることもなく、むしろ、その正反対です。

卑近な例でいうと、初めての土地を車で走るとき、ドライバーは地元の人を呼び止めて道を尋ねます。こういうときのドライバーの物腰は大変控えめで、道を教えるほうも親切に説明してくれます。ただ、ドライバーは、最初の人に丁寧に礼を申し述べた後１分も走らぬうちに、別の地元の人を呼び止めて丁重に同じ質問を繰り返します。そして、また１分後に、別の人に同じ丁重な質問。

人を信用しないということは、人を疑うことではないということが、次第にわかりかけてきたところでした。人を信用しないことと、人を不信の目で見ることとは別のことのようです。

実際、ヨルダンの人は、疑い深いどころか、むしろ迂闊にも見えます。たとえば、初めて訪れた店で、釣銭を切らしていたりすると、たいていの店主は、つぎに払ってくれればいいい、といいます。ぼくとしては、まごつきます。高い買い物ではないにしても、初対面でそんな風に「信用」されることに居心地の悪さを感じるからです。しかし、どうもこれは「信用」とは別ものらしいということにも、気がつきます。客の風体を吟味もせず、目を直視するでもなく、店主はこともなげに、次回払ってくれ、というのです。あきらかに、客を「信用」してツケ払いを認めているのではありません。となれば「施し」になりそうですが、ぼくは乞食ではないので、可及的速やかに「借り」を返したいと思います。信用もされずに借りを作ることは、どうにも落ち着きが悪いのです。店主と自分のあいだに信用関係を勝手に想定し、店主の信用に立派に応えるという関係を自作自演するほうが、ずっと気楽なのです。

ホーシャ村の図書室にて

こういうとき、ぼくにとって当たり前の人間関係は「信用」を信用することに基づいている、ということに気づかされます。あわせて、信用とはなんだろうかと、あらためて考えたりもします。

思うに、他人を信用するということは、積極的に他人の生き方に関わろうとすることです。したがって、局面によっては、信用は暴力にもなります。「私はお前を信用している」という言葉は、往々にして「私の信用を裏切るな」という要請に裏打ちされています。いったん親と子のあいだ、上司と部下のあいだに信用関係が作り出されてしまうと、相互的な信用に基づいて、個人の言動は強く自己規制されます。自縄自縛を強いるのは、上司でも親でもなく、信用関係そのものです。こういう人間関係のなかでは、人は、当然ながら、他人にたいしても自分にたいしても「疑い」深くなります。おれはみなの信用に値しているだろう

か、とよるべなく自問することなど、日常茶飯です。しかし、ヨルダンでは、違うらしい。お婆さんがいうように信用関係を積極的に作ろうとしないところでは、信用関係の綻びである「疑い」も積極的な意味をもちません。

ヨルダンの人には独特の柔和さがある。ヨルダンを訪れる日本人はおおむねそんな印象を抱くらしいのですが、ご多分に漏れず、ぼくもそのように感じました。では、それはどんな種類の柔和さなのか。

結論からいいますと、個人の生き方のなかで他者の介入が許されない私的な領分が相互的に確立されている、そういうところに起因する柔和さではないか、と思います。

在ヨルダン4年目のシニア・ボランティアのMさんが、このことを面白く話してくれました。誰かが頭痛で会社を休んだとしましょう。「頭痛ごときで会社を休むとはけしからん」という日本なら当たり前の非難を、ヨルダンの人は絶対にしない、というのです。「頭痛では欠勤しない」という「普通」の合意を作らない。「おれは頭痛では欠勤しない人であるように、あいつは頭痛で欠勤しなければならない人である」「おれの頭痛とあいつの頭痛は別ものかもしれない」と考える、というのです。

見事な個人主義、というか私人主義です。これをいいかえれば、頭痛とその人との関係は、厳密にその人の私的な領分とみなされ、他人には（そして組織にも）不可侵の領分とみなされる。そういうコンセンサスがみなに共有されている、ということです。

信用関係、また信用関係の総体としての組織が「公共」の名のもとに行使するレトリカルな力にたいして、ヨルダンの人は直観的な不信を抱いている、ともいえるでしょうか。

信用関係を秩序の基盤に据える日本の社会のあり方とヨルダンの社会のあり方の、どちらがいいとかわるいとか、それを測る尺度はありませんし、そもそも比べようのないこと、選択の余地のないことです。ぼくはどうしようもなく「普通の国」の「普通の人」の信奉者であって、信用のレトリックの使い手ですから。

しかし、自分が自分であるよすがを組織的な信用関係へと平然と委ねてしまうことの危うさについて、考えさせられることの多いこの頃です。

自分が自分であるよすがは、自分の身体とのあいだのユニークな関係、プライベートで癒着的な関係にある、そんな風に考えることが多くなりました。

自分が自分であるよすが、その人がその人であるよすがを、その私的な領分において、相互的に、柔和かつ峻厳に承認しあう社会があるのかもしれない。

はや6年が経過してしまいましたが、今も、時折、そのときの驚きに立ち返ります。

参考図書

ヨルダン研究の基本図書から：

Mary C. Wilson, *King Abdullah, Britain and the making of Jordan* (Cambridge University Press, 1987)

Laurie A. Brand, *Jordan's Inter-Arab Relations* (Columbia University Press, c1994)

Andrew Shryyock, *Nationalism and the Genealogical Imagination* (University of California Press, c1997)

読まれています 現代の女流作家達

最近、カウンター内の予約資料が置かれている棚を見ると、女流作家による作品が、いつも何か並んでいます。ベストリーダ（貸出ランキングーOPAC端末で見ることができます）でも、現代の女流作家達の作品が上位に見られます。また、近年の各文学賞でも彼女達の作品が選ばれており、特に学生の皆さんと同年代の、２人の新人女性作家による２作品が、芥川賞を同時受賞したことは注目されました。そこで、図書館で今読まれている女流作家達とその作品、一部ですがご紹介します。

綿矢（わたや）　りさ　本名：山田梨沙。1984年、京都市生まれ。2001年、17歳のときに『インストール』により第38回文藝賞を最年少で受賞。2004年、２作目の『蹴りたい背中』により、史上最年少の19歳で第130回芥川賞を受賞した。早稲田大学在学中。これまでに読んだ作家は太宰治（「…この言葉遣いがカッコいいとか、締めの言葉がうまいな！とか感心したりしていました。…」）や、村上春樹、山田詠美、吉本ばなな等という。『蹴りたい背中』はともにクラスの余り者、ハツとにな川の奇妙な交流が描かれている。周囲にうまく溶け込めずにいる主人公ハツの心の葛藤、にな川に対する苛立たしさやいとおしさ、そんな言葉に言い表せないような感情に共感する読者も多いのでは？

「蹴りたい背中」
綿矢りさ
河出書房新社　2003
本館　913.6IIW47

「インストール」
綿矢りさ
河出書房新社　2001
花川館　913.6IIW47

金原（かねはら）　ひとみ　1983年、東京都生まれ。2003年『蛇にピアス』により第27回すばる文学賞、2004年に同作品で第130回芥川賞を受賞した。小学校６年生の時に父の仕事の関係で、サンフランシスコで一年程過ごした。そのときに山田詠美や村上龍などの小説に出合い、それがきっかけで自分も書いてみたいと思うようになったという。愛読した山田詠美氏は、芥川賞選考委員の一人になっているが、『蛇にピアス』について「良識あると自認する人々（物書きの天敵ですな）の眉をひそめさせるアイテムに満ちたエピソードの裏側に、世にも古風でピュアな物語が見えて来る。小説という手段を必要としている作者のコアな部分が見えるようだ。…」（抜粋）と評している。

「アッシュベイビー」
金原ひとみ
集英社　2004
本館　913.6IIKa52

「蛇にピアス」
金原ひとみ
集英社　2004
本館　913.6IIKa52

出典：文藝春秋　82巻４号（2004.3）

江國（えくに）　香織（かおり）　1964年、東京都生まれ。父親は随筆家の故・江國滋。2004年『号泣する準備はできていた』により第130回直木賞受賞。『冷静と情熱のあいだ Rosso』などこれまでに映画やドラマに映像化された作品も多く、今秋にも映画『東京タワー』が公開される予定。彼女の作品は、代わり映えのしない日常を描いたものでも、現実の世界を離れた、どこかおとぎ話のような雰囲気が感じられる。この独特の浮遊感が江國香織作品の一番の魅力といえるだろう。翻訳の分野でも才能を発揮、最近では歌手マドンナによる全５巻の絵本シリーズ第１作『イングリッシュ　ローズィズ』の翻訳を手がけて話題となった。

「東京タワー」
江國香織
マガジンハウス　2001
本館　913.6IIE44

「号泣する準備はできていた」
江國香織
新潮社　2003
本館　913.6IIE44

村山（むらやま）　由佳（ゆか）　1964年、東京都生まれ。1993年『天使の卵　エンジェルス・エッグ』により第６回小説すばる新人賞を受賞。2003年『星々の舟』で第129回直木賞を受賞した。千葉県鴨川市で農業を営みながら作家活動をしている。そこでの生活を綴ったエッセイ、『海風通信　カモガワ開拓日記』には作者自身による花や野菜のスケッチや、楽しい写真がもりこまれている。他の作品は『青のフェルマータ』『おいしいコーヒーの入れ方』シリーズ『すべての雲は銀の...』等、多数。また、最近刊行された歌手マドンナによる２作目の絵本『ピーボディ先生のりんご』の翻訳もしている。村山由佳の公式サイトYUKA BLUE http://www.yuka-murayama.comがある。

「星々の舟」
村山由佳
文藝春秋　2003
本館　913.6IIMu62

「天使の卵（エンジェルス・エッグ）」
村山由佳
集英社　1994
本館・花川館　913.6IIMu62

唯川（ゆいかわ）　恵（けい）　1955年、石川県金沢市生まれ。地元金沢で10年間OLとして働いた後、小説を書き始めた。2002年『肩ごしの恋人』で第126回直木賞受賞。受賞作に限らず、将来への漠然とした不安と、現状への不満を抱える主人公たちが、自分探しの中で成長し、他人に左右されない生き方を見つけるまでの姿を描くことが多い。直木賞受賞前には中高生などヤングアダルト向けの小説を書いており、1984年には『海色の午後』で第３回コバルト・ノベル大賞を受賞している。現在は新聞で悩み相談欄を担当したり、恋愛にまつわるエッセイを数多く手がけたりなど、幅広い年齢層の女性から恋愛カウンセラー的存在として支持されている。

「肩ごしの恋人」
唯川恵
マガジンハウス　2001
本館　913.6IIY97

「愛がなくてはじまらない。」
唯川恵
大和書房　2002
本館　914.6IIY97

新任スタッフ紹介

本館目録情報係　加藤　舞

早いもので、私が図書館に勤めはじめてからもうすぐ４ヶ月が経過しようとしています。毎日があっと言う間で、皆さんに支えられて非常に充実した日々を過ごしております。私は普段１階の事務室で作業をしていて、閲覧のカウンターに居るのはほんのわずかな時間しかありません。なので、あまりお目にかかる機会はないかもしれませんが、皆さんが気持ち良く利用出来るように努めていきたいと思っております。まだまだ不慣れでご迷惑をかけることも多々あると思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。

本館情報サービス係　作山　綾

みなさんこんにちは！５月から本館閲覧カウンターでお世話になっています、作山綾（さくやま・あや）と申します。藤女子大学でお仕事をはじめて、学内にゆき届いた、小さな資源も大切にするキモチにびっくり＆感動しています。札幌市中心部にありながら緑に囲まれた清閑な雰囲気で、これは読書にも最適！ですね。図書館の利用度は他大学と比べても多いほうと聞きましたが、そんなみなさんの読みたい・調べたい欲求に少しでも多くお答えできるよう、先輩職員の方々と頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします（＾＾）エヘ

本館情報サービス係　坪田　千江子

膨大な量の情報に取り囲まれている現在の我々の生活の中で、自分にとって本当に必要な情報を選び取っていく事が、非常に重要になってきている。大学における研究・学習にとっても、いかに効率よく自分の求めている文献や資料を探し出すかという事は、とても重要な事と思われる。これまでは主に印刷された資料＝紙の媒体で提供されてきたが、現今のコンピュータの発達に伴い、文献を電子化し電子媒体で提供される事が多くなってきている。電子媒体にはCD-ROM等の他インターネット上からの様々な情報や電子ジャーナル等がある。図書館では館内にあるパソコンからインターネット上の情報を手に入れる事もできる。図書館を上手に使いこなし、おおいに活用してほしいと思っています。

花川館情報サービス係　鳥居　英里子

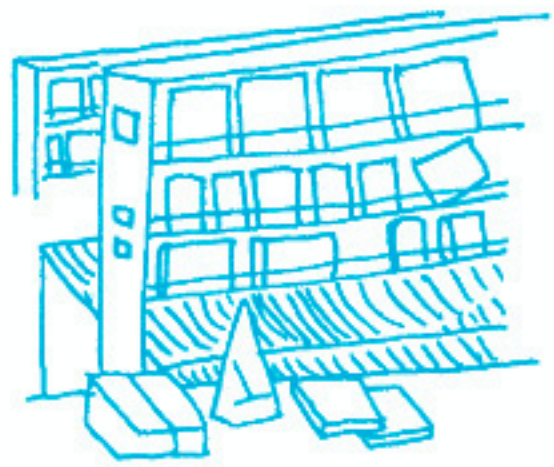
図書館の中を歩くたびに、学生の頃からもっと利用していれば・・・と働き始めてから思うようになりました。いつか借りようと決めていた本もいつでも借りられると思い、ついには借りずに卒業してしまいました。今では、上手に図書館を利用している学生の皆様を見習って（!!）購入希望をこっそり出したりしています。周りの方々の支えのもとで、なんとか毎日を過ごしています。カウンターにいる時、気軽に声をかけて下さいね。よろしくお願いします。

雑誌担当者のつぶやき

みなさんは図書館で雑誌を借りたことがありますか？

“雑誌”と一口に言っても、みなさんお馴染みの「ダ・ヴィンチ」や「オレンジページ」のように書店に並んでいるものから、各大学等で発行されている紀要類までさまざまです。昨年度は本館・花川館を合わせて、１年間で約1,700種類の雑誌を受入ました。冊数にすると10,000冊以上です。受入と同時に、みなさんがOPACで検索ができるように、目録データの作成も行います。現在はその作業のすべてを一人の職員が行っています。だいたい毎日50冊以上の雑誌が書店経由や郵送で届きますが、雑誌はなまものと同じで「鮮度がいのち」なので、届いた雑誌はなるべくその日のうちに受入をし、次の日には閲覧室に並べられるようにできることを心がけています。最新号を一番早くチェックできるのは、やはり役得と言えるでしょうか。

受入が終わると、表紙に日付の入った印をポンッと押して、「ハイ、行ってらっしゃい！」と閲覧室へ送り出します。でも、そこまでで仕事が終わったわけではありません。支払いはもちろん、欠号のチェックや、バックナンバーの製本なども仕事のひとつです。入っているはずなのに、行方不明になった雑誌があれば、一生懸命探しまわります。時々、ページが破り取られているのを見つけたりすると、悲しくなります。「雑誌だからと言って、雑に扱わず、大事に使ってほしい。」それが雑誌担当者の切なる願いです。（N.K.）



お知らせ

この夏、図書館システムが変わります！

夏休み期間中に図書館システムの入れ替えを予定しています。来年１月から全国の図書館データを管理している国立情報学研究所のシステムが変更され、現在本学図書館が使っているシステムでは業務が行えなくなるためです。新しいシステムではOPAC（利用者用検索端末）も一新し、従来のシステムでは出来なかった請求記号からの検索や、携帯電話からの検索が出来るようになります。システム入れ替え作業のため今年の夏休み中には通常よりも閉館日が多くなります。その間利用者の皆さんにはご迷惑をおかけしますが、夏休み明けには今よりもさらに使いやすい図書館として再オープンする予定です。これからの図書館にご期待ください。

＊夏休み中の閉館日は、図書館の掲示板やホームページでご確認ください。

洋書データ整備が終わりました

今年４月から集中的に行っていた洋書のデータ整備が終わりました。新たに作成した書誌は約5,700件です。これにより、今までカード検索しか出来なかったような古い洋書もOPACで検索できるようになりました。タイトル・著者名等のシンプルなデータしか入っていない簡易データがまだ相当数残っているため、今後はそれらをより詳細なデータに変更していく作業を継続的に行っていく予定です。

藤女子大学 図書館だより 第68号 2004.07

発行者 札幌市北区北１６条西２丁目 藤女子大学図書館
TEL 011－736－5407 FAX 011－709－4770
http://library.fujijoshi.ac.jp/index.html